

---

## 新しい中国学に向けた若干の考察

ニコラス・マククリーン

〈英国国際戦略研究所〉

「激動する世界と中国:現代中国学の構築に向けて」の国際シンポジウムの全体セッションのパネリストの一人として招待されたことは大変光栄である。中国が25年間も経済奇跡を続け、WTO加盟を実現し、5年後のオリンピック招聘を決定している今、この新しいセンターの設立は時宜に適ったものであるといえる。中国は、民主的、経済的基準からみても、より広い意味においても、世界の最も重要な国の一つにランクされることは明白である。今月(10月)はまた有人宇宙衛星の打ち上げという科学・技術面でも一時代を画すことになった。

私が、最初に文化大革命の時期に3,000マイルの旅をした31年前の中国と比較してみると、これほど際立ったことはないといえる。当時私が訪問した多くの場所は経済発展が低水準の状態であったし、外交的には、中国は実質的には見捨てられたのも同然であり、ヨーロッパではアルバニアのみ、またルーマニアが一時的に支持したに過ぎなかった。後年私は幸運にも、1980年代、1990年代のほとんどの年に毎年数回中国を訪問し、広く旅行する機会を得た。私は自分自身の目で、村から主要都市に変貌した深圳、また植民地居留地・革命・戦争の下で衰退を余儀なくされた都市から21世紀の輝く巨人に転換した上海を目の当たりにしてきた。

私が生まれたとき56歳で、1910年から18年間中国で過ごした父のお蔭で、個人的証言を読んだり聞いたりする場合でも、あるいは母国により近いところにおいても、私は歴史的な視野から今日の中国を理解する機会を非常に重んじるようになった。父の写真アルバム、逸話、著述が1949年革命以前の古い中国と新しい中国の息吹を伝えてくれているからだ。

同様に、私は明治維新の研究者として、当時の日本と今日の中国との間には特に東洋の価値を西洋の技術と結合させようとしている点において、重要な類似点があるのではないかと思わざるをえなくなっている。名古屋と上海は非常に重要な関係を構築しつつあるし、多くのインフラが現在準備されつつある愛知万博は、世界からの訪問者に対して愛知県、日本のみならず、東アジア地域全体、特に中国への洞察を得るうえで良い機会を与えるであろう。私はまた、愛知県が長い間JETプログラムの積極的なホスト役を務めてきてくれたことに大きな満足を感じている。このプログラムは、国際化と相互のより良い理解促進のために、イギリス、中国を含めて40カ国から数千の若者を日本に招待しているのである。

以上の前置きを述べたうえで、全体セッション・パネリストの一人として、現代中国学の方法論における8つの幅広い争点について焦点を当てたい。これらは4つの特別セッション——政治（私は軍事・戦略問題を含める）、経済、文化、環境——と相互に関連している。時間が許せば、私がそれ自身単独のセッションが必要と思うのは、WTO関連のIPRを議論する経済セッションで出てくると思うが、科学技術の問題である。なぜならこれは、中国における将来変化の最も重要な領域の一つであり、「現代中国学」において絶対高い優先度が与えられるべきだからである。

最初の争点は、分析上の屈折（Analytical Refraction）である。これによって私が意味するのは、非中国人が外部者として自分たちのバックグラウンドから中国を分析することから起こる不可避の歪みである。ちょうど光線が空気や水のような異なる透明な物体を通過するときに屈折するように、もしも我々が自分自身の偏見や心情でもって「他者」（Other）と向かい合うならば、我々の理解は不正確なものになるだろう。故Edward Saidの「オリエンタリズム」は分析上の屈折の多くの例の一つを浮かび上がらせている。中国を分析する上で、我々はアプローチとしては自己批判的に見るだろうが、Heisenbergの不確定性の原理のように、我々は屈折のいくつかの要素を完全に拭い去ることはできない。

第2の争点は、謙虚なアクセス（Humble Access）である。我々がいかにすばらしくてもあるいは我々の結論に対して強力な証拠を揃えていても、我々がすべての答えを強引かつ大胆に仮定するよりも、隠喩的に言えば重荷に耐えながら理解することによって、我々のより自己批判的な方法論が我々を良い方向に導くであろう。中国は多くの逆説や矛盾を生み出していることで有名である。

第3の争点は、透明性（Transparency）である。中国は、改革・開放前の30年間よりは、世界に対して透明性をはるかに増しているのは明らかであるが、情報や意見は民主主義国よりは秘密的であると思われる。国家安全保障への懸念から、データの提供も時には違法となる。すべての政府はそのような懸念を多少とも有しているが、中国政府が現在透明性を許容している程度には非対称性があり、ときにはこれが学術的調査や討論の制約となる。他方、多くの民主主義国は個人のプライバシーを保護するためにデータ保護法を導入しているか導入しようとしている。そのような法律は便益をもたらすが、透明性を損なうことにもなる。

第4の争点は、構成要素の分解（Disaggregation）である。例えばマクロ経済分析がそうだが、中国に関する集計データが使用されることが当然多くある。しかしながら、中華人民共和国は大きな地域格差を抱えているので、平均値をもって見る場合には極めて大きな誤解を招く恐れがある。中国西部のいくつかの地域は途上国に類似しているが、東部や南部の沿岸部はNICSやNIESそのものである。さらに、グローバル性が働く国際貿易問題の分析には考慮されるべき特定の産業が既に存在している。多層経済として、中国が小規模経済よりも複雑さを有しているのは避けられないことである。

第5の争点は、多層性分析（Graduation）である。これは前の争点と関係しているが、集

計、あるいは構成要素の分解に際して分析に影響を与える。それはまた定義の問題を提起しているし、中国が途上国としての特定の便益や責任の適格性を有する一方、NICS あるいは先進国さらには OECD 加盟国として他国に対する適格性を持つという点で、重要な政策的意義が出てくる。

第6の争点は、既知の事実から推論を下す外挿法の問題 (Extrapolation) である。中国の経済成長の上昇傾向と法的枠組みにおける改革の進捗は、中国史の周期的な特徴であった断絶を忘れさせるものがある。中国の分析において、特定の流儀に従って、近い過去から将来を単に推定するよう誘惑に駆られすぎることである。これらの誤りを起させないようにする航海の唯一のガイドは、原因結果の厳格な分析のコンパスによって舵を取ることであり、すべての仮定に問いを発することである。他方、外挿法はそれにもかかわらず有効な分析方法であることが証明されている。例えば Wolfers Wave Theory によれば、1978年後の中国の経済発展のパターンの予測はこれまで正しかったといえる。すなわち、経済特区や沿岸大都市における第1の波があり、第2の波が長江や珠江に進み、現在第3の波が西部、東北に進んでいる。

中国は、世界の激動の中で多くの挑戦に直面している。中国は、引き続き統制と幸運を持って、国内外の新しい問題を克服するだろうが、経済学者の機会費用の原理に従えば、時にはトレードオフと困難な妥協が行われるだろう。将来に横たわっている困難な問題のいくつかは、1980年代に日本が直面したものと類似の、アメリカ側からの圧力に直面している、人民元の切り上げに関する決定であろう。

第7の争点は動機 (Motivation) である。「現代中国学」の最大の挑戦の一つは、国家レベルあるいは地方レベルの政府指導者であろうと、異なる利害グループであろうと、異なる人口グループであろうと、中国の舞台での異なるアクターの動機を正確に判断しなければならないことであろう。例えば、中国はどのようにして世界舞台でその大きく増大している権力を振るうだろうか。

文化大革命の終結以降、それは世界の安定要因となっているが、中国のスポークスマンが非公式に「しかし中国は依然として途上国であり、これを対外覇権主義とみなすのは完全に非論理的である」と言うとき、将来についての懸念がしばしば表明される。中国国内での中国における長い伝統の安定を振り返ることは正しいが、「まだ途上国である」という台詞は「ではいつ主要な軍事大国になるのか」の問いを促すことになる。中国の現在の軍事力と武器は相当なものがあり、中国を含む国際的な軍事並びに政治指導者間の密接な対話が既に有益であることが証明されている。北朝鮮をめぐる難問打開の6カ国協議の旗振り役としての中国の最新の役割は、中国がより前向きの外交的役割を果たそうとする動機を見出した一例である。ただ中国の外交については、19世紀のイギリスについて言及された「イギリスには友人はいない、利害のみがある」との言葉があてはまるかもしれない。

そして最後に、第8の争点は、パートナーシップ (Partnership) である。この点は私の上述の引用が参照されるべきである。その文脈は特に外交の長期的トレンドに関するもの

である。「現代中国学」の本質は、中国内の学界あるいは海外の中国人学者とのパートナーシップを構築することであるべきである。共同の研究プロジェクトや教学面での努力を通じて、私が提起した最初の争点である分析上の屈折の問題がより希薄になる。愛知大学の長期に及ぶ中国との関わりと中国研究における卓越さが、中央政府・地方自治体、国内の実業界に支えられて、国際中国学センターの堅固な基盤を提供することになる。「国際」という最初の言葉は、その将来の成功がパートナーシップに大きく依存している事実を示している。

結論として、最近の中国指導者からの言葉を借りれば、「現代中国学」は「理論と実践を統合する」そして「事実から真実を判断する」ものと予見することができる。

(原文は英語。邦訳 山本一巳)